

南日本新聞

評価励みに一層努力

第3回南日本 経済賞贈賞式 3企業・団体が抱負

第三回南日本経済賞の贈賞式が二十三日、(南日本新聞社主催) 鹿児島市の南日本新聞



南日本経済賞を受賞した(左から)南州農場、ストーンワークス、鹿北製油
23日、南日本新聞会館(写真部・橋口実昭)

会館であり、鹿北製油(湧水町)、ストーンワークス(大崎町)、農事組合法人・南州農場(南大隅町)の三企業・団体に賞状と副賞が贈られた。

式には受賞者と選考委員らが出席。南日本新聞社の水溜榮一社長

が「それぞれが地元の本物を使い、付加価値を高め、鹿児島を代表する商品に育てた。地域経済のけん引役としてますます活躍してほしい」とあいさつ。選考委員長の宮廻甫允(みやまほるゆき)鹿児島大学法文学部教授が選考経過を報告した。

受賞した鹿北製油の和田久輝社長(わだひさあき)は「受賞を機に、契約栽培増えたいという農家が油の引き合いは多く、さらに産地拡大を図りたい」と語った。

ストーンワークスの上中誠社長(なかまのまこと)は「開発から施工、維持管理まで多くの支えあつての受賞。全国へ発信する中で、地元での評価は大きな励みになる」と喜びを話した。

南州農場の本田信一代表理事(ほんだのぶいち)は「思いがけない受賞で恐縮している。『食』に携わる者として、これからも消費者を裏切らない経営をしていきたい」と誓った。

同賞は南日本新聞社が創立百二十五周年、改題六十周年を記念し、二〇〇六年創設した。



鹿北製油、ストーンワークス、南州農場

南日本経済賞決まる

第三回南日本経済賞
(南日本新聞社主催)
は八日、鹿児島市の南
日本新聞会館で選考会
があり、鹿北製油(湧

人や企業などを積極的
に評価する目的で、南
日本新聞社が創立百二
に創設した。

鹿北製油は、県内の
契約農家から仕入れた
無農薬栽培のゴマを主

水町、和田久輝社長、
ストーンワークス(大
崎町、上中誠社長)、
農事組合法人・南州農
場(南大隅町、本田信
一理事長)の三企業・
団体に決まった。

な原料として、昔なが
らの製法でゴマ油を製
造している。ゴマの産
地作りに取り組む地域
性が評価された。

売までの一貫体制を築
いている。食の安心・
安全への取り組みが高
い評価を得た。

鹿児島県の経済産業
振興で顕著な業績をあ
げ、将来性のある経済

ストーンワークス
は、シラスを原料にし
た緑化基盤を開発し
た。路面温度の上昇を
緩和するなど環境問題
に対応。鹿児島市電の
軌道緑化に使われ、全
国展開も見込まれてい
る。

選考は、宮廻雨允氏
(鹿児島大学法文学
部教授)を委員長に、
有山まり子氏(消費生
活アドバイザー)、大
野芳雄氏(鹿児島銀行
会長)、葉山薫氏(島
津興業社長)、吉富信
雄氏(県経営者協会会
長)の五人があたっ
た。

南州農場は、鹿児島
黒豚や独自銘柄「南州
ナチュラルポーク」な
どの生産から加工、販

贈賞式は二十三日、
南日本新聞会館であ
る。

国産白ごまについて

25年前は喜界島に200kgしかなかった白ごまが弊社の契約栽培や栽培指導によって、300名の農家と契約し40トンにまで増え、鹿児島県が日本一のごまの生産地になりました。

これまでいろいろな波もありましたが、農家への栽培指導でごま栽培が復活するなど、農家の方々の契約栽培や協力をいただいたおかげで、私どもが今回の賞を頂いたのだと思います。

国産なたねについて

鹿児島・北海道・青森県での契約栽培者が、300名ぐらいで300トンぐらいの栽培ができるようになりました。



2005年12月22日・・・この日は大雪が降りました・・・。

小さな地球救世主

和田真由美(43歳、湧水町米永)

今年の冬、六歳になる息子は雪だるまを作ろうと張り切っていた。最近すっかり出番のなくなった手袋をどこからか持ち出し、準備万端だった。

この町に来て三年になる。栗野岳と連なる山々、実り豊かな田畑に満々とわき流れる名水、小高い土地にあるわが家からは四季折々の風情が楽しめる。越してきた冬は、十五坪にもなろう積雪があり、真っ青な空と白銀世界の大パノラ

かすり随筆

マに感動した。その日、大きな雪だるまを作って大満足の主人と息子の写真が飾ってある。その写真を見ては、雪はまだかと待ち続けた。

季節が変わった。無言で写真を見ていた息子に「雪降らなかったね」と声を掛けると「温暖化だからじゃない」と即答された。励ますつもりでいた私は、予想外の言葉に失望し深刻な事態だと落胆した。しかし息子は「温暖化って地

球が暖かくなるんだよ。ママ、雪だるまを作りたい。どうしたらいい」と話続けた。いや、違う!

地球救世主がここにいる! 再び雪だるまを作らんがために一生懸命に考えている小さな心に、大きなエネルギーと無限の可能性を感じた。この子たちがいる限り、

地球は大丈夫だ、と思いを改めた。そばでじっと聞いていた娘は三歳、そう大雪の冬に生まれた娘はまだ雪を知らない。未来の人々が永遠に豊かな四季を楽しめるよう、母もエゴに取り組もうと誓った。小さな救世主とともに。